

沈黙の母——ヒサエ・ヤマモト「十七文字」とジョン・オカダ
『ノーノー・ボーイ』における一世と二世の母子物語

大久保 良子

沈黙の母

——ヒサエ・ヤマモト「十七文字」とジョン・オカダ『ノーノー・ボーイ』における
一世と二世の母子物語

大久保 良子

序

日本人のアメリカへの移住の歴史は、サトウキビ畑で働く労働者として149名がハワイに渡った明治初期の1868年に始まる。1885年から10年間は、鉄道建設現場や鉱山等で働く労働者として、多くの日本人が西海岸へ移住した。1907年以降、日本からの新規労働者の流入は規制されるが、一世の独身男性の妻／婚約者（「写真花嫁」）としての日本人女性は入国を許可され海を渡る。こうして西海岸一帯に日系人コミュニティが築かれていくのだが、やがて一世と二世との間には、言語や習慣の違い、市民権の有無といった点で世代間の溝が生じ始める。加えて一世の親たちは、親への忠誠心や家族のための我慢など、日本の古い家族的道徳を二世に押し付けがちであったため、アメリカで教育を受けた二世たちとの溝をより深めることもあったという。しかし、真珠湾攻撃直後の1942年2月、大統領政令により「敵性外国人」とされた11万2千人（うち3分の2はアメリカ国籍を所有）の日系人が、砂漠等に散在する10か所の強制収容所へ送られると、親たちの側にある変化が生じたと考えられる（佐藤158－159、小林「多文化主義的家族像」174－175）——「第二次大戦中は、市民権を持たない親の世代（敵国人）対市民権を持つ子供たちの世代（アメリカ市民）として分断される事態が起き、戦後はそうした屈辱的な経験を二度と繰り返さないためにも、親たちの方から、自分たちの過去や民族性を覆い隠そうとし、子供たちにもそれについて語り伝えることを控える傾向が顕著となったの

である」(小林、『ジェンダーとエスニシティで読むアメリカ女性作家』160-161)。日系一世と二世とを隔てるこうした分断状況において、「互いに意志の疎通を図り、相互間の絆を打ち建てるには、何よりもまず、そうした沈黙を突き崩すことが先決になる」(161)と小林富久子は主張する。

日本語での創作活動が抑圧された一世に対して、二世たちは収容所内の新聞等で、英語での創作活動を行い、戦後は日系のみならずアメリカ社会全体に向けて自己発信していった。戦前、古い日本的価値観を押し付けた親たちへの反発や、戦後黙して多くを語らず耐えた親たちへの想い、そして、親子でありながら相互にうまく表現、理解することもままならないもどかしさを抱えた二世たちの葛藤に、英語によって表現を与えることで、日系アメリカ文学は花開く。こうした日系アメリカ文学は、Hisaye Yamamoto、Wakako Yamauchi、Yoshiko Uchida、Mitsue Yamadaなど、比較的女性作家を多く有し、また、二世の子どもの視点から一世の親との関係(特に母娘関係)を掘り下げて描いたため、フェミニズムや多文化主義が盛隆した1970年から1980年代以降、注目されるようになった。しかし、女性作家たちの作品における母娘関係がよく議論される反面、母と息子の関係を描く文学は看過、もしくは単体での議論になりがちである。それゆえ、ジェンダーの観点から男女で異なる母子の関係を踏まえ、男女それぞれの日系アメリカ人作家が描く母子関係を検証すれば、作品における母子の距離感にいかに大きな差があるかが明らかになると思われる。

そこで本稿では、日系二世の女性作家Hisaye Yamamoto (1921年 - 2011年)の代表作、「十七文字」(“Seventeen Syllables” 1949年)、および日系二世の男性作家John Okada (1923年 - 1971年)の小説『ノーノー・ボーイ』(*No-No Boy*, 1957年)に描かれる親子関係、特に母子関係に着目する。この二作品で一世の母とアメリカ育ちの二世の子との間には、言葉や文化、考え方の違いなど、埋めがたい溝が横たわっており、両作品とも厳しい現実と直面させられる母の姿を描き出しているからである。しかし、母・娘関係の文学と母・息子関係の文学では大きく様相が異なる。Yamamotoは、思春期の娘の共感的なまなざしを通して、一人の女性としての母が持つ苦しみに肉薄し、結末では母が長年

沈黙してきた物語を娘に語り聞かせるに至る。母の言葉は、恋愛に目覚めたばかりの娘にいかに響き、母娘の絆にどのような影響を及ぼすだろうか。対する John Okada の *No-No Boy* では、戦後のアメリカにあってなお日本の勝利を妄信する母は、二世の息子に日本人としての生き方を強いるその言葉で息子を呪縛し続ける。このように、戦後「民族性を覆い隠そうとし」「子供たちにもそのことについて語り伝えることを控える」どころか、よりいっそう民族性を主張し、日本人のアイデンティティと誇りを押し付ける母と息子の関係を、戦後間もないアメリカ社会を舞台に描くとき、Okada は、二世の息子に、母にどう対処させ、そしてまたアメリカ社会で生きる自己を模索させようとするだろうか。Yamamoto が描く、母娘ならではの共感と一体感、アンビヴァレンスに彩られる母娘の物語は、Okada が息子目線で描く、母への反発と決別の物語との対比によって、より際立つだろう。

1. 「十七文字」—沈黙に見る母娘の絆の可能性

「十七文字」で私は母の物語を語っているのですが、自分自身のことを語っているのかもしれませんが—どんな状況においても自己の創造性を表現する女性という点で…」（Cheung, *Words Matter* 348）とインタビューで語る作家は、作品に描かれる「表現する母」と自分との一体感を感じている。そんな思い入れのある母と娘の物語を描くにあたり、Yamamoto は、King-Kok Cheung の言葉を借りれば「ダブルテリング」（*Articulate Silence*, 29）という手法を採用する。すなわち、高校生の主人公のロージー（Rosie）に寄り添った語りが映し出してゆく物語世界では、俳句に没頭する母とそれに苛立つ父との不穏な関係がまずひとつのプロットとなり、そのクライマックスとして、母が受賞した一等の賞品である広重の浮世絵を、夫がなたで叩き壊し、灯油をかけ燃やす場面が描かれる。それに併行して、少女にとって最大の関心事—2学年上で、ロージーの両親のトマト畑で働くメキシコ人労働者の息子、ヘイスース・カラスコ（Jesus Carrasco）との恋愛—を中心としたプロットが進行する。無関係に見える二つのプロットは、絵を焼き払われた母が沈黙を破り、父との結婚に至る

までの過去を娘に語り始めるクライマックス後の場面において奇妙に絡み合う構造となっている。主人公は若さゆえ、また言葉や文化の違いゆえに、一世の両親の言葉や行動、沈黙の意味を正確には理解できず、彼女が示す情報は限定的だが、大人の読者には真の意味が了解されうる仕組みとなっている。

ロージーの母、トメ・ハヤシは、日本でのとある悲しい恋愛を経て、「自殺するかわりに」(18)「写真花嫁」としてアメリカに渡り、嫁いだ女性である。日系一世たちの中には文芸愛好家も多く、桑港新聞、北米日報等の邦人紙の文芸欄に小説、エッセイ、詩、短歌や俳句が盛んに投稿された。その常連には女性も数多く含まれていたという(小林、『ジェンダーとエスニシティで読むアメリカ女性作家』158、佐藤143)。トメもそんな一人であった。家事や農作業に追われる長い一日を終えると、彼女は俳人「ウメ・ハナゾノ」となって寝る間も惜しんで俳句作りに没頭するようになったが、その喜びは、たった三か月しか続かなかった。「十七文字」は、俳人「ウメ・ハナゾノ」として母が存在しえた、三か月という短い期間にスポットをあてた作品である。

母は、自作の俳句を娘に披露するも、ロージーにはそれを味わう日本語能力もなければ、英語に不自由な母と日本語でうまく話す自信もない。自らの乏しい日本語力を悟られ、母を失望させないように、また母への気遣いから、ロージーは“*Yes, yes, I understand. How utterly lovely*”(8)とお決まりの返事をして受け流す。英語を話す二世同士では自由に自己表現できる少女であるものの、日本語で伝えるという点では、表現者の母と対照的に、うまく表現できずに、また遠慮から言葉を抑え込み、母との和を保とうとする少女である。しかし母は、娘が本当は分かっていることもすっかりお見通しなのだろう。俳句という十七文字に意味を込める日本文化の説明とともに、自作の俳句の解説をやさしくほどこし、アメリカ生まれの娘に日本の文化を教え、自分が没頭している世界を少しでも娘と共有しようとする(8)。夫もまた俳句を理解しない人物であるが、彼女が俳句の解説をし、共有しようするのは娘だけだ。こうして母の俳句への情熱に触れているロージーは、言葉が分からないからといって母の趣味に理解を示さないわけではない。ロージーは、雑誌で見つけて面白

いと思ったフランス語まじりの英語俳句を母に伝えてその面白さを分かち合いたいと望み（8－9）、俳句関係の客を追い返して早く作業に戻るよう父から母の元に使いにやられた際には、ゆっくりと歩いて「ウメ・ハナゾノ」としての時間を少しでも長く確保しようとするなど、言葉少なくとも母親に一定の理解と同情、やさしさを示す「母の娘」といえる。

自己表現を望む俳人「ウメ・ハナゾノ」という、表現者としての母の姿を照射すると同時に、夫である父の姿が娘のまなざしを通じて描かれることにより、次第に「ウメ・ハナゾノ」が、「妻」に期待されうる伝統的役割から逸脱しがちな存在であることが明らかになってゆく。「ウメ・ハナゾノ」は、自己表現の喜びを得、同じ俳句仲間と楽しく語らい、その作品も高く評価される実力を持つ存在である一方で、夫にとっては、伝統的な「妻」の役割を十分に果たさず、時に制御困難になる他者として映る。妻として夫に寄り添い、また、家庭や農場経営を支えるなど、労働力としての妻の役割を期待する夫にとって「ウメ・ハナゾノ」は、日常を乱す厄介者でしかない。「ウメ・ハナゾノ」は、夜中まで俳句作りに没頭するあまり、話しかけられても気づかないことがしばしばあり、また、俳句の趣味をもたない夫は、妻の俳句仲間の客人の輪に入れず、一人時間を持て余すしかない。そんな夫に気づかず、いつまでも俳句話に夢中になる妻に、夫は黙って耐えつつも苛立ちを隠せない。自分は理解しない俳句という世界を理解する知的で魅力的な男性たちと対等に議論を交わし、その作品の出来栄を誉めそやされる妻は、「主人」である自分の劣等感を掻き立て、収穫作業にも支障をきたす、耐え難い存在なのだ。苛立つ夫と申し訳なさげに詫げる妻との間には、大きな溝があり、家族3人家へ向かう車内でも、沈黙が重々しく横たわっている。

As they rode homeward silently, Rosie, sitting between, felt a rush of hate for both—for her mother for begging, for her father for denying her mother. I wish this old Ford would crash, right now, she thought, then immediately, no, no, I wish my father would laugh, but it was too late:

already the vision had passed through her mind of the green pick-up crumpled in the dark against one of the mighty eucalyptus trees they were just riding past, of the three contorted, bleeding bodies, one of them hers. (12)

母の趣味を受け入れず不機嫌に黙り込む父に腹を立てるだけでなく、そんな父に詫げる母にも腹立たしく思っていることは、ロージーが、母と異なる自己も持っていることの証左である。だが、ここでは母との同一視の方がより問題となるだろう。というのも、この白昼夢は、結末に訪れる、父が俳人としての母の人生に終止符を打つ悲劇—つまりは「ウメ・ハナゾノ」の死—を不吉に暗示しており、ロージー自身もまた破壊されたイメージとして想像されているからだ。

従来のフロイト派理論に反論した対象関係論の精神分析学者たちの流れを汲むドロシー・ディナー・スタインやナンシー・チョドロウらフェミニストたちによれば、前エディプス期における母子の共生的関係は、異性である息子よりも同性の娘との関係においての方がはるかに長く続き、そのため娘が成長しても、緊密かつ問題含みな母子関係を保つ傾向が見られるという。たとえばチョドロウは、『母親業の再生産』において、母親との関係は、娘と息子とでは体系的に異なるとし、エディプス・コンプレックスの出現や解決は、男の子の場合「親業への関係可能性を切断し、あるいは縮小する」一方で、女の子の場合は「公然と保ち続け、拡げていく」(136)と指摘する。フリースやオールデンら多くの精神分析家たちが示す母子の症例においても、「融合、投影、ナルシシズム的延長、個別性の否定」は、異性の「他者」として経験される母・息子間よりも、自己の延長として経験される母・娘間に起こりやすいという特徴が顕著に表れている—「フリースはこう述べている。『母親は、娘を体験し扱うとき、精神病患者の＜転移＞の態度—＜わたしはおまえで、おまえはわたしだ＞—を持っている』」(チョドロウ149)。娘もまた、母親に対し強い愛着や過度の同一視をもつ。それゆえ、母とは異なる自己を確立するために母と距離を取る必要に

駆られる場合もあるという。

こうした母娘の緊密な関係とそれが生む葛藤は、母の物語とロージーの恋愛物語とが絡み合う一連の場面によく示される。

秘密の話があるから夜、作業小屋へ来てほしいとヘイスースに呼び出されたロージーは、両親に気づかれないように注意を払いながら、ヘイスースの待つ小屋へと向かう。ロージーは、高校生ながらまだ性に無知で幼さの残る少女であり、ヘイスースの誘惑にも気づかない。しびれを切らせたヘイスースがロージーの手を握り、キスをする、ロージーは今まで知ることのなかった「恐ろしくも甘美な感覚」(14)に、一瞬言葉を奪われ、「初めて完全に無力の犠牲」(14)となる。

ロージーが「女」として性に目覚めた瞬間は、甘美であると共に、抵抗できない無力感を知り、言葉を奪われる瞬間でもあることは示唆的である。というのも、物語に登場する大人の女性たちは、その性にまつわるエピソードにおいて例外なく、犠牲を払い、苦しみを抱える無力な女性たちだからである。ハヤシ家が家族ぐるみで付き合うハヤノ家の母は、4人の元気な娘を持つが、第一子出産以来ずっと体の不調に苦しんでいる。生まれ故郷では村一番の美人として通っていたミセス・ハヤノは、今や腰を曲げ、足を引きずり、体を絶えず震わせながらゆっくり歩くことしかできない。そんな彼女を見て、「この女の人はこんな体で、三人も子供を身ごもり生んだんだわ」(10)とロージーは彼女を見るたびに痛ましく思うのだ。また、後の場面では、ロージーの母が、18の頃に未婚のまま妊娠・死産し、恋人に捨てられ、村にいられなくなった過去を持つことが明かされている。

我に返り、小屋から逃げ出したロージーは、皮膚に残るその感覚を洗い流すように風呂で入念に体を洗い、湯につかって冷静さを取り戻す。しかしその感覚は、奇妙にも、クライマックス後の母娘の場面で再び蘇えることになる。

編集者との俳句話に夢中になって農作業に戻らぬ妻にいいよ耐えられなくなった父は、編集者が持参した賞品の浮世絵の額を斧で叩き割って灯油をかけ燃やすという暴挙に出る。「ウメ・ハナヅノ」の創作の火が消されるように次

第に消えゆくその炎を、母と共に部屋の奥の窓から黙ってみつめるという言葉
を介さないシーンは、静かに寄り添う沈黙の中に母娘の悲哀と絶望とが滲む場
面である。母は静かに、どうして自分が父親と結婚したのか知っているかと娘
に問いかけ、そこから、母が十七年間ずっと内に秘めてきた自分の過去の物語
を語り始める。「そんな話、今聞きたくないわ。彼女はそういいたかった。…
しかし母が今、過去を語り出そうとしていることが分かった。その話が暑い午
後の、今見たばかりの手荒な行為と結びついて、自分の人生を、自分の世界を
すっかり破壊してしまうことがロージーには分かっていた」(18)と心の中で
思うロージーには、母の結婚前の恋物語が、今始まったばかりの自身の恋愛の
行末や人生を暗示するものとしてすでに察知されていたのだろう。ここにも母
娘の一体視が生む娘の葛藤が見られる。

18の時、村の裕福な長男と恋仲になった母は、密かに逢瀬を重ね、やがて
妊娠に気づくが、相手にはその身分にふさわしい縁談もまとまっていた。家族
に蔑まれる中月足らずで生んだ息子は死産であった。村にいられず、自殺する
かわりに親戚のつてを頼って、アメリカにいる、噂では「心の優しい」父のも
とに「写真花嫁」として嫁いだのだった。17年間抑圧しつつも「繰り返し繰
り返し自分に語りかけてきたためにすっかりそらんじてしまって」(19) いる
ようなその物語を語り終えた母は突然、ひざまずき、ロージーの手首をつかむ
と、「約束して。絶対に結婚しないって！」(19)と懇願するのだった。

Suddenly, her mother knelt on the floor and took her by the
wrists. “Rosie,” she said urgently, “Promise me you will never marry!”
Shocked more by the request than the revelation, Rosie stared at her
mother’s face. Jesus, Jesus, she called silently, not certain whether she
was invoking the help of the son of the Carrascos or of God, until there
returned sweetly the memory of Jesus’s hand, how it had touched her
and where. Still her mother waited for an answer, holding her wrists so
tightly that her hands were going numb. She tried to pull free. Promise,

her mother whispered fiercely, promise. Yes, yes, I promise, Rosie said. But for an instant she turned away, and her mother, hearing the familiar glib agreement, released her. Oh, you, you, you, her eyes and twisted mouth said, you fool. Rosie covering her face, began at last to cry, and the embrace and consoling hand came much later than she expected. (19)

母の握る手の感覚によって、ヘイスースに触れられた時の感覚と甘美な記憶が呼び起こされ、ヘイスースとの逢瀬の場面がロージーの内に再現される。同時に、読者には、身分違いの恋に溺れた若かりし頃の母親と、ヘイスースに誘惑されるロージー両者の、危うい恋のイメージが重なり合って想起される。母が、思春期の娘にこのような懇願をするのは、自分の分身・延長であるような娘が、自らと同じく男性に破滅させられるような人生を送ることだけは事前に阻止したいとの切迫した思いに駆られてのことだろう。言葉の壁や文化の違いなど、世代間に越えがたい大きな溝があってもなお、母娘は互いに連続した存在であり、それゆえに、両者に葛藤が引き起こされていることが窺える。

階級を超えた自由恋愛の上、未婚で子を身ごもり死産した18歳の母は、村ではその逸脱した存在を認められることはなかった。「ウメ・ハナゾノ」としての母もまた、他者には称賛されるも、夫には存在を否定され、暴力的に葬られてしまった。一度ならず二度までも自分の存在を消されたともいえる母から出た衝撃の懇願と一連の母娘の反応については研究者の中でも様々な解釈がある。小林は、ロージーの返事が、冒頭の、母の俳句に対するロージーの返事と呼応することから、「作者はここで明確に母・娘間の絆の欠如を日系人としての民族的アイデンティティの喪失と結び付けている」(『ジェンダーとエスニシティで読むアメリカ女性作家』167)と捉え、母娘の断絶のみならず民族的アイデンティティの喪失を読み取っている。別の論考でも、「母娘間のギャップを強調している」(「多文化主義的家族像」181)とのスタンスを崩さないが、「時さえ熟せば、娘のロージーも母の窮境を理解し、そこから教訓を引き出しうる」

とする Stan Yogi の主張にも同意を示している (181)。Yogi は、ロージーが望むよりずっと遅くに抱擁されるこの場面を、「大人の人生に伴う興奮、痛み、幻滅」へとイニシエートされゆく娘に母が期待する「成熟」を示すと解釈する (146)。Cheung もまた、気ままな子供世界から混乱させるような大人時代へのロージーの成長を示すとして、Yogi に同意している (“Introduction” xxi)。

涙に咽ぶロージーが切望したのは、ヘイスースに抱擁され愛撫された時の、「恐ろしくも甘美な感覚」(14)ではなく、泣き声を上げればすぐに母が抱きしめ、慰めてくれた子供の頃のような、母子の一体感に心地よく包まれる感覚であったろう。大人時代へのイニシエーションの場面というよりもむしろ、いつまでも幼い母の子供として母親の腕に包まれ、癒撫の手を感じることに、つまり言葉のいらない幼少時代への退行を望み、遅かったとはいえそれが母から与えられた場面ではなかろうか。冒頭の母の俳句の場面でのロージーの言葉、“Yes, yes, I understand.” と呼応するロージーの “Yes, yes, I promise.” という言葉についても、冒頭の場面と同じく、母は、ロージーが本当は理解しておらず表面的なものだとお見通しなのだ。「あんたは…ばかだね」(19) というように顔を歪める場面は、一見すると、ロージーの表面的な返事が母を失望させたように見える。しかし、それは決して母子の断絶を表すのではあるまい。これから恋をし、大人になろうとする娘にそのような悲しい約束をさせてしまった母親である自分に対して—そして、意味が分からずとも本意でなかろうとも母の望む答えを返した健気な娘に対して—いたたまれなくなり、「あんたは、あんたは…ばかだね」と言うように顔を歪めたとも読めるのではあるまいか。短い言葉に滲むそんな母の思いは、たまらず泣き出した今のロージーには分かるべくもない。それでもいつか分かるときがくるのではないか—。共に傷つき慰めを求める日系人母子の絆の可能性は、表面ばかりの言葉ではなく、慰撫と抱擁という非言語でのコミュニケーションと沈黙によって仄めかされる。

2. 『ノーノー・ボーイ』—日本の母の死とアメリカの息子の生

一方の息子の文学における母子関係はどうだろうか。1943年、アメリカ政府は、強制収容所にいる17歳以上の日系人に、アメリカへの忠誠を誓わせる「忠誠登録」を行った。¹⁾ その中で特に重要となる2つの質問—(1) 合衆国軍への参加の意思があるか、(2) アメリカへの忠誠を誓い、日本への忠誠を絶つか—にNoで答え、徴兵を忌避したゆえに2年間刑務所で過ごした「ノーノー・ボーイ」、25歳のヤマダ・イチローがJohn Okadaの小説*No-No Boy*の主人公である。²⁾ アメリカ社会のみならず日系人社会でも「ノーノー・ボーイ」への差別が激しい戦後間もない時代において、イチローを始めとする日系人たちの苦闘を描いた作品である。俳句のように、多くを語らずその行間に意味を込めたYamamotoとは対照的に、Okadaは内的独白の手法を用いて、饒舌すぎるほどにイチローの内面を語り尽くしてゆく。

イチローがアメリカへの忠誠を誓わず、収監されることを選んだのは、イチローに日本人としてのアイデンティティや日本的価値観を押し付けた狂信的日本主義者の母に反抗するだけの強さを持たず、盲従したところが大きい。2年の刑期を終え、故郷シアトルに戻っても、久しぶりに再会した日系人の友人にすら唾を吐きかけられるなど、「ノーノー・ボーイ」を待ち受ける現実の厳しさをイチローが知らしめられるところから物語は始まる。現実を理解している父は、親のために辛い2年間を過ごさせてしまった息子に詫び、帰還を歓迎して、社会復帰をゆっくりと見守り応援する姿勢を見せる。一方の母は、イチローがアメリカへの忠誠を誓わず牢に入ったことを、自分の息子として当然の、誇らしい行動と見做し、もし息子がアメリカ軍に入ったら自分は恥ずかしくて自殺するとまで言い切る。

母の狂信的日本主義は常軌を逸するレベルになっていた。日本の敗戦を信じず、日本政府がやがて船で迎えに来るのを心待ちにしており、生活に困窮する日本の親族が、恥を忍んでアメリカまで施しを求める手紙を書いてきても、手の込んだ細工だとして一向に信じない。そんな母は、父がそうしたように刑期を終えた息子をあたたかく迎え入れ、ゆっくりと話を聞くよりも、近所の日系

人の友人たちへの挨拶に「自慢の息子」を連れ出し、自尊心を満たすことを優先させる。その相手が、イチローとは違い、息子がアメリカ軍に従軍して、帰らぬ人となってしまった日系人の家庭であって、その母を泣かせてしまうことになってもお構いなしだ。そんな妻を、「病氣」だとして父はどうすることもできず、アルコールで気を紛らすばかりである。社会では場を見出せず、家では狂信的日本主義者の母に理想の日本男児像を押し付けられるイチローは、「ノー・ノー」で答えた当時の選択を大いに後悔し、やり場のない憤りを「狂った」母にぶつける。

“You’re crazy.” He said it softly and deliberately, for he wanted her to know that he meant it with all the hatred in his soul. ...Her face revealed only the same little tight frown that he had seen many times before. He waited, hoping that she would scream and rant and cry and denounce him, tearing asunder with fury and slender bond that held them together still, and set him free. ...

She shrugged without actually moving. “That is what they all say. They who claim to be Japanese. I see it in their faces and I feel it on their lips. They say I am crazy, but they do not mean it. They say it because they are frightened and because they envy my strength, which is truly the strength of Japan. ...

... “Not your strength, crazy woman, crazy mother of mine. Not your strength, but your madness which I have taken. Look at me!” He gripped her wrists and wrenched them away from her face. “I’m as crazy as you are. See in the mirror the madness of the mother which is the madness of the son. See. See!” (42-43)

母の狂気ゆえに「ノーノー・ボーイ」となってしまったイチローは、自分の口から母の狂気を知らしめることで、母を怒らせ、親子の縁を切ってその呪縛

から解放してもらいたいと願うが、母はいっこうに揺らがない。自らの中にも母の狂気があり、それゆえに苦しんでいると母に認めてもらいたいと願う息子の悲痛な叫びすら母には響かない。岩のようなあまりの頑迷さゆえに、母を切り離したくとも傷つけたくともどうにも太刀打ちできないのだ。

弟のタローもまた、母の呪縛に苦しむ一人だが、「自分に昼も夜もつきまとい、自分の内部を引っ張り出して、無意味な断片に変えてしまい、ゆっくりと自分を破壊しつつあるのが、母にまつわる何かだということ」(66)に気づかなかった兄のようになるまいと、「自分とどうしようもなくまじりあっているそれを切り離し、兄の苦悩から自分を救う」(66)べく、18の誕生日を迎えるとアメリカ軍への従軍を志願する。つまり、自己の安寧を保つために、母が押し付ける理想の息子像の逆を生き、狂信的日本主義者の母やノーノー・ボーイの兄を切り捨て、「狂人」／日本が支配する家を出てアメリカに忠誠を誓う市民となることを選ぶのだ。

「狂人」の母のあまりの強さと頑迷さゆえに、どうにも母の呪縛から逃れられなかったイチローだが、母の自殺という、思いがけない形で母から解放されることになる。タローの件で落胆する母に追い打ちをかけるように、父は、施しを求める日本の姉からの手紙を母に読み聞かせ、現実を見せようとするが、そこには、いつもの手紙とは違い、「きんちゃん」と呼ばれていた母と姉にしか知りえない二人だけの幼少期の秘密一川で溺れかけたこと―が書かれていた。これまで手の込んだ小細工だと思って取り合わなかった多くの手紙が、本物だったかもしれないこと、母が信じてきた世界は幻想であったかもしれないことが、徐々に母にも分かり始めたのだろう。幻想によって固められた母の「現実」が壊れると同時に、母は崩壊する。生きる力を失い、本物の狂気へと陥った母は、バスタブで自らを溺れさせ、命を絶つのだった。「小柄で、ぺちゃんこな胸で、形のくずれた女、髪はうしろにしめあげ、かたい饅頭にしていた。彼女の身体はかっこう悪く、やせて、まるで13歳の子供がそれ以来何十年もかかって干上がって固くなり、体の方は一向に発達しなかったというふうだった」(10－11)と、最初の登場場面で描かれていた母は、日本で「きんちゃん」と呼ば

れていた子供時代から内面が変わることなく年だけを重ねた存在だったのだろう。耐え難い現実を知った時、その現実生きるよりも、浴室のバスタブに川のように水を張り、「きんちゃん」と呼ばれていたあの頃の、美しく懐かしい幼少時代の日本を作り上げ、そこに身を投じることを選んだのだ。

母の遺体をバスタブからあげる際、イチローは裁判官のような冷静さをもって、今まで自分を呪縛していた母に、その罪状を述べるような言葉を投げかける。

Dead, he thought to himself, all dead. For me, you have been dead a long time, as long as I can remember. You, who gave life to me and to Taro and tried to make us conform to a mold which never existed for us because we never knew of it, were never alive to us in the way that other sons and daughters know and feel and see their parents. But you made so many mistakes. It was a mistake to have ever left Japan. It was a mistake to leave Japan and to come to America and to have two sons and it was a mistake to think that you could keep us completely Japanese in a country such as America. ...Suddenly I feel sorry for you. Not sorry that you are dead, but sorry for the happiness you have not known. So, now you are free. Go back quickly. Go to the Japan that you so long remembered and loved, and be happy. (186)

親子の情愛など感じられたことのなかった母に対し、母の犯した誤りをあげつらううちに、あれほど憎く理解不能な存在だった母のことが、来るべきではなかったアメリカという土地で幸せになれなかった一人の女性として客観的に理解しなおされるようになっていく。息子としてその死を悲しむことはなく、過ごせるはずだった幸せな時を過ごせなかった女性に同情し、死によって自由になったことで、愛する日本に帰って幸せになってくれることを望む。この内的独白に見られるように、イチローの思う幸せな母親の姿は、イチローやアメリ

カと完全に切り離されている。母の幸せは、アメリカや家族と切り離された、自分の知らない日本にあると理解した息子もまた、母から切り離されたようにその呪縛から解き放たれるのだ。

母が亡くなると、イチローも父も悲しみもみせず、アメリカという自由な世界で享受してしかるべき自分自身の幸せを求めてゆく。イチローは葬儀の途中で抜け出して、好意を寄せる女性―母とは対照的にアメリカ人女性のようなスタイルをもつ女性エミーとダンスパーティーへと繰り出し、これがあるべき幸せだと喜びを噛みしめる。立派なスーツを新調した父は、葬儀ではうれしさを抑えきれない様子で弔問客と話し、家では、母の手前できなかった日本への支援物資の荷造りや店の改装計画に夢中になる。そこには妻に対して常に弱腰でアルコールに溺れていたかつての姿はなく、本来の健全な父の姿を取り戻している。弟のタローは、アメリカ軍での訓練を順調にこなし、連絡すらない。長年の呪縛から解放された家族は、薄情に見えるほどに、アメリカでの各々の幸せを追及する。

ノーノー・ボーイを取り巻く状況は厳しいながらも、イチローを理解する人々にも出会い、将来への明るい兆しを見出だしたところで物語は終わる。こうした結末に関してむろん批判もある。たとえば小林は、「自分もまた大きな米国社会の一員として受け入れられることを夢見始めている」イチローが知る必要があるのは、「いかに周縁にしようとも、母もまた、アメリカ社会の真正な一部だったということである。他の一世たち同様、母もまた当初はアメリカ社会から求められながら、後に追放の憂き目にあった一人だからである」（「多文化主義的家族」178）と、その物足りなさを示している。Satoは、「日本的なもののすべてを拒絶する登場人物を通じて日系アメリカ人であると主張しようとしている作品」と看破し（239）、多様な人々との出会いや内的独白にも関わらず、「プロットはつまるところイチローが「アメリカ人」であることの再認識となる」と述べる（241）。

母の死の場面の直前には、アメリカ軍へ従軍し、戦争で負った脚の怪我が原因で、切断すれどもすれども徐々に身体が蝕まれてゆく友人ケンジの苦悩と死

が描かれたが、それに比してイチローを蝕んだ母への執着と葛藤は、母の自死によって完全に切り離すことであまりに容易に解決しており、それまでの壮絶な葛藤の物語を矮小化しかねないように思えるのだ。母への愛着、共感のまなざしが主人公に最初から欠如して、情緒的絆が一切なく、母への憎しみと自己の苦しみばかりに主人公の目が向いており、死の場面を除いて、母は一人の人間というよりも絶対悪の「狂人」としてしか描けていなかったことも、切断があまりに容易に行われた一因だろう。また、先に引用した場面で、鏡の中の自分に母の狂気があるとのイチローのセリフはあったが、鏡写しのイメージとしてしばしば捉えられる母娘関係においては、母は、死後もなお折々に娘と人生が交差し、亡霊のように影響を及ぼし続ける“dead-undead mother” (Kahane 336) となりがちである。これとは対照的に、生きながらにして亡霊のようだったイチローの母はその死によって永遠に葬られる。歩む人生や社会が母と息子とではあまりにかけ離れており、その人生が交差することも思い起こされることもないのだ。

結び

日系アメリカ文学では、一世と二世の関係や、移民地における一世の困難な適応状況がよく描かれてきたが、フェミニズムの隆盛に伴い、特に母子関係や一世の女性が受けた抑圧が注目される。必然的にその検証は女性作家に偏りがちになり、作品分析も同作家内、あるいは同じ女性作家間であることが大半である。そうした現状を踏まえて本稿では、初期の日系アメリカ文学を代表する男女2人の作家、Hisaye YamamotoとJohn Okadaの作品における母子関係を取り上げ、母の描き方、心的距離、対処の違いを浮き彫りにしてきた。今後、より多くの女性、男性作家の作品を、時代を追って取り上げ、検証してゆくことで、男女の経験の差異をより緻密に捉えながら、日系アメリカ文学の全体像やその変化を浮き彫りにすることが可能になるだろう。

Hisaye Yamamotoは、代表作「十七文字」において、思春期の娘のまなざしを通して、表現者としての母や、思い通りにならない妻に苛立つ父を描き、

一人の女性としての母の無念や喪失感に肉薄した。母のプロットに並行して娘の物語も描き、結末で両者を重ねあわせることで、大人の女性を待ち受ける暗い将来を体現する母への葛藤もまた浮かび上がらせた。それでもなお、沈黙のうちに慰めを求める母娘の関係が描かれる。一方、John Okadaの*No-No Boy*では、狂信的な日本主義者である母親は、ノーノー・ボーイとしての苦しみに耐えかねる息子になお日本人としての理想を押し付ける。そこに親子の情緒的絆は最初から存在せず、ただ狂気と憎しみ、呪縛があるのみであった。イチャローがどうあがこうにもその信念が一切揺るがない強大な母親は、存在する限り、アメリカ社会で生きようとする主人公を苦しめ続ける。結局は母の自殺という形で母を永遠の沈黙へと追いやり、母を海の向こう日本へと切り離すことで、主人公は、アメリカらしい、個人の幸福追及の自由を得ている。俳句のように沈黙に深い想いと余韻を残す「十七文字」において、Yamamotoが日本的な母娘の絆を描いたとすれば、忠誠を誓わなかったその社会で受け入れられない苦しみから発したノーノー・ボーイの物語は、母を切り離し、自己探求に自由と希望とを見出す結末へと変貌することで、皮肉にも、アメリカの息子らしい物語になったといえるのかもしれない。

註

- 1) 忠誠登録のキーとなる2つの質問の詳細は以下のとおりである。
Question No. 27: Are you willing to serve in the armed forces of the United States on combat duty wherever ordered?
Question No. 28: Will you swear unqualified allegiance to the United States of America and faithfully defend the United States from any or all attack by foreign or domestic forces, and forswear any form of allegiance or obedience to the Japanese emperor, to any other foreign government, power or organization? (Weglyn 136)
- 2) オカダ自身はノーノー・ボーイではなく、アメリカ兵として従軍しており、友人のノーノー・ボーイを思って書いた作品と言われている。生前はアメリカ社会でも日系社会でも受け入れられず、失意の中心臓発作で亡くなり、残された作品はこの一作のみとなった。忘れられていた小説が偶然発掘され、評価を受けるのは彼の死後、1970年代になったからのことである。詳しくはFrank Chin 参照。

引用文献

- Cheung, King-Kok. *Articulate Silences: Hisaye Yamamoto, Maxine Hong Kingston, Joy Kogawa*. Ithaca: Cornell UP, 1993.
- . "Introduction." Yamamoto, Hisaye. *Seventeen Syllables and Other Stories*. New York: Kitchen Table, 1988. xi-xxv.
- , ed. *Words Matter: Conversation with Asian American Writers*. Honolulu: U of Hawaii P, 2000.
- Chin, Frank. "Afterword: In Search of John Okada." Okada, John. *No-No Boy*. Seattle: U of Washington P, 1976.
- チョドロウ・ナンシー『母親業の再生産—性差別の心理・社会的基盤』大塚美津子、大内菅子訳、東京：新曜社、1981年（Chodorow, Nancy. *The Reproducing of Mothering*. Berkeley: U of California P, 1978.）
- Kahane, Claire. "The Gothic Mirror." *The (M)other Tongue: Essays in Feminist Psychoanalytic Interpretation*. Ed. Garner, Shirley Nelson, Claire Kahane, Madelon Sprengnether. Ithaca: Cornell UP, 1985. 334-351.
- 小林富久子『ジェンダーとエスニシティで読むアメリカ女性作家—周縁から境界へ』東京：学芸書林、2006年
- .「多文化主義的家族像」木下卓、笹田直人、外岡尚美編『多文化主義で読む英米文学—あたらしいイズムによる文学の理解』東京：ミネルヴァ書房、1999年
- Okada, John. *No-No Boy*. Seattle: U of Washington P, 1976.
- Sato, Gayle K. Fujita. "Momotaro's Exile: John Okada's *No-No Boy*." Lim, Shirley Geok-lin and Amy Ling ed. *Reading the Literature of Asian America*. Philadelphia: Temple UP, 239-258.
- 佐藤清人「初期日系アメリカ文学に関する考察」『山形大学紀要（人文科学）』第17巻第2号、2011年。141-154.
- Sugiyama, Naoko. "Issei Mothers' Silence, Nisei Daughters' Stories: The Short Fiction of Hisaye Yamamoto." *Comparative Literature Studies*. Vol. 33, No.1. 1996. 1-14.
- Yamamoto, Hisaye. "Seventeen Syllables." *Seventeen Syllables and Other Stories*. New York: Kitchen Table, 1988. 8-19.
- Yogi, Stan. "Rebels and Heroines: Subversive Narratives in the Stories of Wakako Yamauchi and Hisaye Yamamoto." Lim, Shirley Geok-lin and Amy Ling ed. *Reading the Literature of Asian America*. Philadelphia: Temple UP, 131-150.
- Weglyn, Michi. *Years of Infamy: The Untold Story of America's Concentration Camps*. New York: Morrow, 1976.